

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0472700426		
法人名	医療法人社団 眞友会		
事業所名	グループホーム「けやき」		
所在地	宮城県黒川郡大和町吉田字新要害10番地		
自己評価作成日	平成26年3月9日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成26年3月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「関わりを大切にした自立と共生の支援」を法人理念に掲げ、そのもとで事業所の理念・方針を職員全員で作成できるようにしております。今年度は、長年「けやき」を支えて来て下さった職員の退職や他事業所への異動が重なり、入居者様・ご家族様へ大変ご迷惑をお掛けしてしまいましたが、新体制となった事で職員は「今」できること「今」しかできない関わりを大切にし、お一人お一人の想いに寄り添う事で、安心して生活が送れるように実践しています。医療面については、併設の診療所・介護老人保健施設との連携を図ることで、必要な医療が受けやすい条件が整っている。法人内には、研修会などを企画する部署があり職員が自己研鑽に励みやすい環境となっております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

清山会医療福祉グループにある眞友会は、診療所・介護老人保健施設・居宅介護事業所等を運営し、併設して「けやき」を開設し今年で10年目になる。入居者は明るく家庭的なホームでゆったりと過ごしており、職員一人ひとりの想いをついに「笑顔と愛があふれるけやき」を目指し〜まごころ〜として目標を掲げ、新体制で取り組んでいる。向上心を持って働けるよう職場環境等の整備に努めており、現場の職員を中心にプロジェクトチームを作り、努力している職員を月間MVP制度で表彰するなどやりがいを持って自己研鑽に励んでいる。ケアプランにおける家族の評価も良かった。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

2 自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 グループホームけやき)「ユニット名 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	スタッフの意見を取りまとめ形で理念・運営方針作成し、実践に繋げている。それぞれを玄関・食堂に配置すると共に折に触れ話すようにしている。	「関わりを大切に・・・」の基本理念に加え、独自の理念「明るく家庭的な安らぎのあるホーム」を掲げ実践に繋げている。年度末に全職員で理念の確認をして、けやき目標「まごころ・・・」を新年度からスタートしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域のイベントに積極的に参加したり、食材を地域の商店から取り寄せ配達して頂いたり交流はあるも、町内会への参加はしておらずより密な関係づくりが課題である。	法人合同の夏祭りには家族・地域住民等も参加し花火大会を皆さんで楽しんだ。畑や花を通して住民とふれあい、傾聴ボランティアや中・高校生の体験学習等、町の「まほろば祭り・文化祭」等で交流を深めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	併設の介護老人保健施設と合同で家族介護教室を開催している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	日常の様子はスライドショーにまとめ紹介する事で、より理解しやすいように取り組んでいる。	会議は年3回開催し年度末に開催の予定である。保健福祉課・家族4名・区長・人権擁護員等もメンバーに加わり、ホームの様子など質問も出されている。会議は年6回以上の開催となっており、それには至っていない。	県のガイドラインは会議を年6回以上の開催としており、目標計画が達成されるよう構成委員の幅を広げて早期から開催を検討し、地域交流の足がかりとなるようにしていただきたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議での交流が主であるが介護保険更新の際などは書類を郵送せずに保健福祉課に出向くようにしている。	保健福祉課には出来るだけ出向いて情報や助言を頂いている。運営推進会議の参加や町で行っている春・秋のグリーン作戦に2～3名の入居者も参加して協力関係を築くように努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束を行うことにより生じる様々な弊害を理解し、拘束をしないための代替案を考えながら実践している。玄関の鍵は日中はせず、夜間のみ防犯の観点から行っている。	身体拘束の弊害について年2回研修を実施し、正座体験の苦痛等を全職員で共有している。転倒防止で床の上にクッションやカーペットを敷いたり、夜間時のセンサーチャイム等拘束をしない工夫をしている。日中施錠はしておらず近隣に協力をお願いしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者は虐待防止に関する研修を受け、職員にどのようなことが虐待にあたるかや虐待防止に対する考え方の周知を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護については、勉強不足と感じている。今後は研修会への積極的な参加を検討している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、十分な時間をとり詳細を理解しやすいように説明することを心がけている。また、グループホームの強みと弱みを同時に説明するようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者については、言葉にならないささいな状態の変化も見逃さないよう気を配りニーズに寄り添えるように努めている。ご家族については、状態の変化は逐一報告し、面会時には積極的に声掛けし状態報告と希望の聞き取りを行っている。	来訪時に意見など聞き、それを記録に残し職員間で共有している。入居者の口腔ケアの習慣づけに取り組んだり、加齢臭による洗剤や柔軟剤など家族と協力して反映されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度職員会議を開催するほか、管理者は職員が意見を出しやすい環境づくりに努めている。また、随時きにかかるとはなにか声を掛けるようにしている。	スタッフ会議や申し送り時に意見や要望など聞く機会を設けている。職員の提案で行事内容をボードに書き食堂に掲示したり、各事業所のプロジェクトチームにより職員の現場の声を取り入れて反映されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	月間MVP制度があり、職員を表彰するなどの働きが形として認められやすい。また、職場環境・労働条件の変更時にはトップダウンではなく、現場の職員によるプロジェクトチームを作り検討するなど職員の思いが反映しやすい環境となっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人主催の育成プログラムに沿って実践しているほか、年2回目標管理(面談と評価)を行っている。また、可能な限り法人以外の研修を促している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内の他事業所との合同研修会のほか、地域医療情報交換会へも参加を促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には、安心してサービスを利用できるように話し合いを密に行っている。また、入居直後は特に重要な時期と考え関わりを重視し、早期に信頼関係を築けるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	今後に相互理解につなげるため重要な時期と考えている。特に入居直後は生活の様子を電話連絡するなど、できる限り不安が解消できるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居申し込みの段階でニーズから本当に必要なサービスは何なのか検討し、他のサービスがより合うものと判断した際は、そのサービスの説明をしたり関係各所と連携を図れるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、本人が得意なこと・苦手なことを見極め必要以上のケアとならないように努めている。生活の場面では、本人と職員が一緒に行う事を大切にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	月1回発行のけやき新聞で生活の様子をお知らせしたり、行事の際には積極的に参加を促している。生活歴の把握にも意識的に取り組んでいただいている。また、通院や外出の際にも協力を仰いでいる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前からのなじみの美容室を利用していたり、自宅近くの商店に買い物に出かけたりしている。また、なじみの人や場所についての話を意識的にすることで、なじみ感覚が途切えないように関わりを持っている。	今までの関係が途切れないように、馴染みの美容室や近くのスーパー等へ出掛けたり、まほろば祭り等で知人と再会している。また、リハビリに通う中で顔なじみになり関係性を持って柔軟に対応している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性を尊重しながらも、必要時には職員が間を取り持つことで関係性が良好に築けるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用が週終了したとしても「縁」は続いていくものと考えている。お看取りさせていただいた方についてもメモリアルコーナーを設置している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	生活内にあえて縛りとなるような日課は設けず、本人のペースで生活しやすいようにと考えている。希望や意向を自ら表出することが困難な方については、関わりの中からそれらを見つけ出すよう努めている。	アセスメントからその人のニーズを把握し、会話の中でのさりげない言葉を受け止めて、ミーティング等で話し合い支援に繋げている。入居者の声で10日を「どんべいの日」として定めて喜ばれている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	関わりの中やご家族の情報から把握するよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の観察の重要性を理解し、ささいな変化にも気付けるように努めている。気付き得た情報については、申し送りノートを活用し共有を図っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアのあり方について職員間で話し合う場を設け、担当職員は事前に家族様のご意向を聴取し、様々な視点からのアプローチを行える様にしている。	気づきの記録や申し送りノートを活かしミニカンファレンス等で話し合い、家族や医師等の意見を聞き介護計画を作成している。モニタリングは毎月行い、介護計画の見直しは半年毎に行い家族の評価は良かった。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	言動や表情などをそのまま記録することで、ありのままの生活がわかるように努めている。情報の共有を行い、介護計画へのつながりが行えるように配慮している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	リハビリニーズに添えるよう、医療デイケアを活用している。また、重度化についても、併設の介護老人保健施設の看護師や診療所の看護師の協力をいただき、可能な限りでの医療的処置が行える状況である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源の把握・活用については、まだまだ不十分であると感じている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	併設の診療所の医師がかかりつけ医となっており、連携が図りやすい環境である。必要時には、専門医を受診することで適切な医療を受けられるように取り組んでいる。	併設の「きぼうの杜診療所」がかかりつけ医であり、月2回の往診もある。他の専門医との連携も良く必要に応じて職員が対応している。週2～3回看護師による入居者の健康をチェックしており、安心に繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設の介護老人保健施設の看護師や診療所の看護師と連携を図っており、介護職員は状態の変化を報告し医学的な視点での助言を得て対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	今期は入院のケースはいなかったが、医療的なニーズの高い方は少なくない状態である。入院まで必要な状態とならないようにかかりつけ医と連携をはかりながらの健康管理に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化に対する指針を説明し了承を得ている。実際に終末期となられた場合は、改めて関わり方についての話し合いの場を設けている。二月に1ケースの看取りをさせて頂いております。	今回看取りを行い家族からの協力も頂いて1名の方をお見送りした。対応指針・同意書等を交わして段階的に話し合いが行われ看取りを実施した。職員研修を実施し共有化を図り、医療との連携は構築されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	併設の介護老人保健施設と合同で定期的に研修会を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を実施している。非常食や備蓄品の準備を行い災害時に備えているが、地域住民の方々との連携については不十分と考えている。	年2回消防署立会いで合同避難訓練を実施し、夜間想定も行っている。独自の訓練として図上訓練等定期で行っている。地域住民の協力など避難方法にもひと工夫されたい。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人の尊重すべき目上の方であるという認識の中でも、生活歴や性格を考慮し、それぞれに合わせた対応を心掛けている。排泄や入浴の際についてはさりげなく促すことでプライバシーに配慮している。	その人の人格を尊重し女性は下の名前で、男性は苗字で「～さん」と呼んでいる。興奮時は「ちゃん付け」で呼ぶことで落ち着く方がいる。トイレ誘導時や失禁時の対応等、声のトーンを低くしプライバシーに配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	なかなか希望を表出できない方や遠慮されている方もおり、職員側から希望を聞き出したり、一緒に行きたいという想いを伝えるなど希望を表出しやすい環境作りに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的には、決まりきった日課は設けず、ご自分のペースで生活していただいている。状態により必要となるケアも必然的に出てきますが、なるべく生活の中にケアが組み込まれるように配慮している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴や外出時に一緒に服選びをすることで、その人が好まれる身だしなみが行えるよう配慮している。また、馴染の美容院へ出向きやすいように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	準備や片づけについては、ご本人の能力や意向に合わせて行っていただいている。また、食べたいメニューを聞いたり、一緒に献立を作ったり定期的に提供できるようにしている。	地域の商店から野菜・魚・肉等購入し関わりを大切にしている。職員が献立を作成し併設の管理栄養士から栄養バランス等の助言を頂いている。野菜の皮むき等一緒に行い、食卓を囲んでの和やかな食事風景である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	それぞれの身体状況や嗜好に合わせて提供している。特別食の提供は難しいが、定期的に併設の介護老人保健施設の管理栄養士から助言をいただき、メニュー内容の検討を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの重要性について職員は理解しており、毎食後とはいかないまでもケアに取り組んでいる。ご自分で行える方についても促しを行い、習慣となるように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表の活用により個別での排泄パターンの把握はある程度行っている。ケアの必要な方へは排泄動作の苦手な部分のみ介助を行い羞恥心に配慮している。	個々の排泄パターンを把握し、トイレ誘導時はその人の出来ない部分を手助けしている。夜間帯はポータブル使用や必要な方へセンサーチャイムで対応し、安心と安眠の支援に繋げている。3名の方は自立している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	定期的に牛乳やヨーグルトなどの乳製品の提供を行っている。午前中の運動も取り入れているが、食事や運動での改善が難しい方もいるため、内服での対応も併用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	ないべく希望に添えるように対応している。入浴方法や入浴時間などは身体面に影響の出ない程度に心掛け、それぞれの習慣に配慮している。	一日置きに午後の時間帯の入浴である。生活習慣や状態に配慮しての清拭等、希望があれば同性介助で対応している。ゆず湯・菖蒲湯等を楽しみ、拒否の方にはタイミングや日を改めるなど入浴に繋げている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝環境に配慮し、安眠できるように取り組んでいる。日中の活動が夜間の安眠につながるように、そのバランスにも配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	各個人の内服薬の作用・副作用が記載している説明書を閲覧できる状態とし、誤薬防止マニュアルも作成し周知している。また内服の変更時には、申し送りノートを活用し情報の共有に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	役割については個人の思い優先されるように尊重している。楽しみごとの支援については、入居者の希望に添えるようにし、職員も入居者と一緒に行い、共に楽しむことを大前提に考えている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	お一人お一人の希望に添える努力はしている。近所のスーパーや神社等へも車椅子で散歩しながら行ったり地域の方と交流する機会をもてるようにしている。外出をおっくうがる方についても、閉じこもりの弊害も理解した上で外出の促しを行っている。	暖かい日には近くを散歩し車椅子の方も一緒にスーパー等で買い物している。行事では花見・新緑・紅葉狩り等、また、入居者の一声で白鳥見学に出掛け、外食なども楽しんでいる。外出を拒む方にも声掛けし、無理強いないよう心掛けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自己管理が原則であるが、特にお金を持つことへの制限は行っていない。希望がなければ職員が金庫でお預かりし、必要時には職員と一緒に買い物をして出納帳に記載している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙でのやりとりはないが、電話は自由にかけていただいている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	設えについては、季節感が感じられる装飾を入居者と職員が一緒に行っている。また、一カ月ごとの外出などの予定が分かるように掲示している。しかし、自分の都合にてテレビのチャンネルや音量を変更される方がいるため、常時快適かというところはいかなが、その都度説明し環境の調整を行っている。	広い食堂は天窓からの光彩と四季感ある中庭を眺め、歌や体操をしてゆったりと過ごしている。回廊式の廊下は随所に「ふくろう」が飾られ一人になれるスペースもある。桜の花びらの装飾がホーム全体を温かく包み、心地のいい空間づくりになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	各入居者が自分の居場所をつくっており、その空間を大切にしている。孤独にならないように配慮はしているが、身体的に転倒のリスクが高い方は一人になれる環境をつくる事は難しい状況である。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者により差はあるが、ご家族に馴染みの物がそこにあることの重要性を理解していただき、できる限り協力していただいている。また、個人の趣味に合わせたものを配置するようにしている。	居室の扉には大きな文字で名前が記されており、一步入ると天窓や大きな窓で明るく、使い慣れた筆筒・テレビ・衣装箱等配置されている。手作り品や家族の写真を飾り安心して自分の住まいとして生活している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリー設計の他、転倒リスクの高い方の居室には掴まり立ちしやすいように柵を配置したり、センサーを活用し有事に迅速に対応できるように配慮している。		